コースアウト

立川マナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コースアウト

【Ｎコード】
Ｎ０５０７Ｔ

【作者名】
立川マナ

【あらすじ】
猛スピードで山道を下っていく一台の車。やがてあるカーブに差し掛かり、男は思わぬ人物と遭遇する。

ただ、やみくもに車を走らせていた。アクセルを目いっぱい踏みこんで、暗い山道を下っていた。その先のことなど考えず、ヘッドライトの明かりを追いかけるように、ただただ、前に前に。俺は駆け下りていたんだ。

次から次へと繰り返される急カーブを、乱暴にハンドルを回して切り抜ける。遠心力に振り回されて、シートベルトが身体に食いこんだ。

心臓が熱くなる。呼吸が荒くなっていく。

スポットライトが看板を照らした。

――スピード落とせ。

俺は無視した。うるさい、と一蹴した。

アクセルを踏みこむ。

まっすぐ前を照らすヘッドライトが、やがて湾曲したガードレールを照らした。

息を呑む。呼吸が止まった。ハンドルを握り締める手に力がはいった。全身が固まったように動かない。足の裏がアクセルのペダルに張り付いてしまったかのようにぴくりともしない。

エンジンの音も、風が車体をたたく音も、全て消えた。

ガードレールが目の前に迫る。

衝撃が全身に襲い掛かった。重力が巨大なハンマーとなって身体を打ち付けてきた。

それから、いったいどれほど経ったのだろうか。

ぼうっとする意識の中、音が聞こえた。声が聞こえた。

誰かが窓を叩いている。

すっと瞼を開くと、人影が見えた。誰かが立っている。窓を叩い

て何かを言っている。暗くてよく見えないが……制服を着ているようだ。警察……か？
ゆっくりと身体を起こす。
不思議とどこにも痛みはなかった。どうやら、怪我もないようだ。無事……か。
鼻で笑って、シートにもたれかかる。
その間も、警察官らしき人物は窓を叩き続けている。
さすがに、無視して逃げることは不可能だ。俺は観念して窓を開けた。ガードレールにつっこんだというのに、この車はなんて頑丈なんだ。しっかりと窓も開く。
さて、なんと言い訳しようか。
半ば自暴自棄になりながら、「なんですか？」と白々しくも俺は訊ねた。すると、
「スピード出しすぎ。死ぬ気？」
その声に、俺は愕然とした。
白いヘルメットをはずす警察官。ばさりと黒い髪をなびかせて、彼女は俺に微笑みかけた。
雪のような白い肌。ほっそりとした顎。形の良い眉。そして、ややつった目。華奢な体つきは変わらない。
心臓が掴まれたような気分だった。そこに立っていたのは、三年前に別れた恋人だった。
「真……美？」
「久しぶりね」と彼女は答えた。「三年ぶり？　まさか、こうしてあんたと再会するなんて。皮肉もいいとこね」
「どういうことだ？　お前……」
なぜ、真美がこんなところにいるんだ？　幻か？
状況が全く把握できない。事故のせいだろうか。痛みは無いが、やはり、どこか頭を打ったのだろうか。
「ああ、これ？」真美は思い出したかのように言って、ヘルメットをひょいっと掲げた。「あんたと別れてこっちに来てから始めたの。

この辺、事故多いからさ、しょっちゅう来るはめになるのよね。ま、ここは私にとってもいわくつきの場所だしね」
返す言葉が見つからない。口をあんぐり開けて俺は絶句していた。
切れ長の瞳が、そんな俺を責めるようにじっと見つめていた。
「てゆーか……あんたは、こんなところでなにしてんのよ？」
ため息混じりに叱る彼女の声。懐かしいと思った。
「夢、じゃないよな？」
「夢みながら運転されちゃたまったもんじゃないわよ」
真美だ。
俺は思わず窓から身を乗り出していた。
「真美！　俺、お前がいないとだめなんだ！　一緒にいたいんだ」
声が震える。涙がこみあげてくる。なんて情けないんだ。
真美はそんな俺を冷たい眼差しで見下ろしていた。
「なに、バカなこと言ってるのよ。未練がましい男は無理。二度と、私の前に顔出さないで」
吐き捨てるようにそう言って、真美はヘルメットをかぶりだした。
「待ってくれ！」と俺はすがるように叫んで、ドアを開けようとドアノブをつかむ。が、何かがつっかかっているのだろうか、ドアノブはぴくりともしない。舌打ちしてドアを蹴り飛ばすが、やはりびくともしない。
真美は気にも留める様子もなく、身を翻してこちらに背を向けた。
「真美！」
窓から声を張り上げる。――そのときだった。
「今回は見逃してあげる」
さっきとは違う、柔らかい声で真美はそうつぶやいた。くるりと振り返った真美の顔には、穏やかな笑みが浮かんでいた。天使のような……神々しくも、優しさに満ち溢れた笑み。
「ちゃんと前見て走って。コースアウトなんて、カッコ悪いよ」
どこか寂しげにいたずらっぽく言って、真美は顔を前に向きなおした。

俺は声一つ出せずにいた。
なぜだろう。何か答えようという気がまったく起きなかった。
呆然として、俺は真美の後ろ姿を見送った。闇の中へ消えていく、その後ろ姿。それを目に焼き付けるようにじっと見つめていた。
やがて、どこからか、悲鳴にも聞こえる不気味なエンジン音がした。真美が乗ってきたバイクだろうか。そのエンジン音は徐々に遠ざかっていく。
追いかけてはいけない。いや、追いかけられない。そんな気がしていた。
もう、真美と俺は違う世界にいるんだ。俺は彼女のいない道を走っていかなければならないんだ。それを……ようやく、悟った。
すっと力が抜けていった。
俺は大きくため息をつき、シートに身をゆだねた。頭を押し付けるように倒し、すっと瞼を閉じる。
暗闇。真美のいない世界。それは延々と続く道。俺の進むべき道。

やがて、どこからか、規則的なリズムを鳴らす電子音が聞こえてきた。
「三年前のあのカーブなんでしょう？」
誰かの声が聞こえてくる。
「ああ。例のあのカーブだってよ。真美が事故ったのと同じ……」
「わざと、つっこんだ……のかな？」
「だろうよ。丁度一昨日、真美の命日だっただろ。まず、間違いなく――」
ゆっくりと瞼を開くと、ぼんやりと白い天井が映った。
「浩二！」
いきなり、甲高い声が鼓膜をつらぬいた。
「気づいたのか」
視界に飛びこんできた、二つの顔。ショートヘアの幼い顔立ちの女と、短髪の面長の男だ。洋子と長島。大学時代からの友人だ。

何度か瞬きをする。――それがやっとだった。どこか動かそうとすると、身体中に鈍痛が走る。首を固定されているらしく、頭を動かすこともできない。
「医者……！」と長島が慌てた様子で叫んだ。「医者、呼んでくる！」
バタバタとせわしい足音が響いた。相変わらず、落ち着きが無いな。
「助かってよかった」
ふと、洋子がそうつぶやいたのが聞こえてきた。目をやれば、瞳に涙をためた洋子が疲れ果てた表情で俺を見下ろしていた。
「本当に、よかった。ガードレールにつっこんだんだよ？　覚えてる？　車もぺしゃんこだったって言われて……私、もう」
堪えきれなくなったのか、洋子は嗚咽を漏らして泣き出した。
「助かったら奇跡だ、てお医者さん、言ってて……」
「真美に……追い返されたんだ」
自分でも驚くほどか細い声がでた。
洋子はハッとして赤く充血した目を大きく見開いた。
「真美？　でも、真美はもう……」
「未練がましい男は無理だ、とさ」
頬に激痛が走った。どうやら、俺は微笑もうとしたようだ。
しばらく洋子は不思議そうにしていたが、しばらくあってから安心したように微笑んだ。
「真美らしいね」
「……ああ」
瞼を閉じると、再び目の前に暗闇が広がった。俺の進むべき道。絶望じゃない。それは先の見えない未来。
進むよ。君の分も、前に。

（後書き）

５／６に内容を少し変更いたしました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0507t/

コースアウト

2011年5月7日05時55分発行